

笠間焼

誕生250年

伝統と新しい創造力から
生まれる造形美

笠間焼は、笠間の土と伝統釉の柿釉や糖白釉などで主に甕かめやすり鉢といった日常の器の産地として長く栄えてきました。時代の流れとともにプラスチック製品等が隆盛となり、窯元数が8件まで減少したこともありましたが、50年ほど前から現代の生活様式に合わせたものへと生産を転換し、生活食器や美術品など新しい作品が次々と開発され、それと合わせて全国から作家が集う産地に変貌しました。

現在では、約300名の作家が市内外で活動しています。先人達の仕事を尊重しながら時代の新しい波を受け入れ、何度も息を吹き返してきた笠間焼は、笠間の自由闊達な空気の中で日々新たな可能性を生み出し続けています。

笠間焼のあゆみ

1772-1780

久野半右衛門が信楽の陶工・長右衛門の指導により、現・笠間市箱田で開窯。

笠間焼の興りの一つである「箱田焼」が始まる。

1789-1817

笠間藩主 牧野貞喜まきのさだよしが製陶業を保護・奨励する。

1830

陶工・山口勘兵衛が宍戸村（現・笠間市大田町）で開窯。

笠間焼の源流の一つ「宍戸焼」が始まる。

1853

笠間焼の技法を学んだ大塚啓三郎が、現・栃木県芳賀郡益子町で「益子焼」を始める。

1861-1863

笠間藩主 牧野貞直が六つの窯元を「仕法窯」として指定し、窯業を保護・奨励する。



笠間焼が今年で誕生二五〇年を迎えます。

笠間焼の産業としての歴史は江戸時代からですが、笠間には縄文時代や弥生時代の土器、奈良時代から平安時代にかけて使われた窯跡が残っており、はるか古代から焼き物作りが行われてきました。

伝統的な技術と新たな創造力で、今もなお多くの人に愛される笠間焼。

先人たちがつないできた歴史をふり返し、笠間焼を後世につなぐ取り組みや想いを紹介します。

1869
美濃藩（現・岐阜県）の陶器商 田中友三郎が「仕法窯」の一つ、関根窯を譲り受け窯業を始める。「笠間焼」と名付け、販路を拡大する。

1950
茨城県窯業指導所が笠間市下市毛に開設される。

1966
芸術村が笠間市下市毛に開かれる。

1972
窯業団地が造成される。

1982
第1回笠間の陶炎祭ひまわりが開催される。

1991
笠間焼協同組合が設立される。

1992
笠間焼が国の伝統的工芸品に指定される。

1998
陶芸体験施設「笠間工芸の丘」が開館。
陶芸体験施設「笠間工芸の丘」が開館。

2000
東日本初の陶芸専門美術館「茨城県陶芸美術館」が開館される。
第1回彩初窯市が開催される。

2016
茨城県立笠間陶芸大学校（茨城県窯業指導所を改称）が開校される。

2020
笠間市と栃木県益子町の焼き物文化と歴史を紡いだストーリー「かさましこ」兄弟産地が紡ぐ「焼き物語」が日本遺産に認定される。

2022
笠間焼が誕生250年を迎える。

2022
笠間焼が誕生250年を迎える。

笠間焼を 後世につなぐ

作家、笠間焼協同組合、市などが一丸となり、
将来のさらなる発展につなぐ取り組みを行っています。



笠間焼誕生二五〇年祭 ・伝統と革新の笠間焼プライド・

これまでの歴史に感謝しながら、
将来のさらなる発展につなげる
記念事業を行います。

テーマは「伝統と革新の笠間焼
プライド」。

笠間焼をさらに身近に楽しめる
取り組みや笠間焼の歴史をふ
り返る取り組みなどを計画して
います。

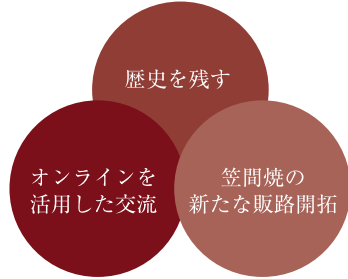
詳細が決まりしだい市のホーム
ページやSNSなどでお知らせし
ますのでどうぞお楽しみに！

オープニングイベント開催

笠間焼作家による記念対談などを行います。

日時：9月23日（金・祝）10時～

場所：笠間公民館（笠間市石井2068-1）



▲テストピース



笠間長石 ちようせき

250年の節目に産地のさらなる
発展に向け、笠間産の新しい
釉薬原料の開発に着目しました。
笠間焼協同組合・県立笠間陶
芸高等学校が連携し、市の特産で
ある「稲田石」からできた陶磁
器原料を研究開発。
地元石材業者にも協力を得な
がら完成したこの笠間産新原料
を「笠間長石」と名付けました。

笠間長石とは

笠間長石は、日本最高級の石
材「稲田石」の微粉末を使った
釉薬原料で、主に長石・石英（珪
石）・黒雲母の3つの鉱物から構
成されます。

特徴

ほかの代表的な長石「福島長
石」「釜戸長石」と比べ、笠間長
石には鉄分が多く含まれていま
す。これにより、焼き方によつて
薄い黄味や薄い青味がかかったり、
黒雲母の斑点が出たり、味わい
深い色調を引き出します。



笠間焼を海外へ

笠間焼を海外にも広めようと、英国を中心とした海外販路開拓事業を令和2年度から本格的に実施。国の「JAPANブランド育成支援等事業」の採択も受けたプロジェクトです。

笠間焼協同組合が主体となる「笠間焼海外販路開拓協議会」が中心となり、笠間焼作家32名と共に活動しています。

英国向け商品開発

芸術系・小売系アドバイザーなど英国有識者からのアドバイスをもち、英国向けの商品を開発。英国陶器フェアへの出展や、現地販売を行いました。また、笠間市内でも、スタジオ *nido* や陶芸祭で「KASAMA POTTERS展」を行いました。

英国アーティストとのコラボ作品制作

デザイナーのドナ・ウィルソンをはじめ、英国の陶芸家、レストラン、フラワーアレンジなどの教育機関とコラボレーションした作品を新たに制作。ロンドンで開催された展示会でお披露目し、注目を集めました。



▲ 英国陶器フェア出展の様子



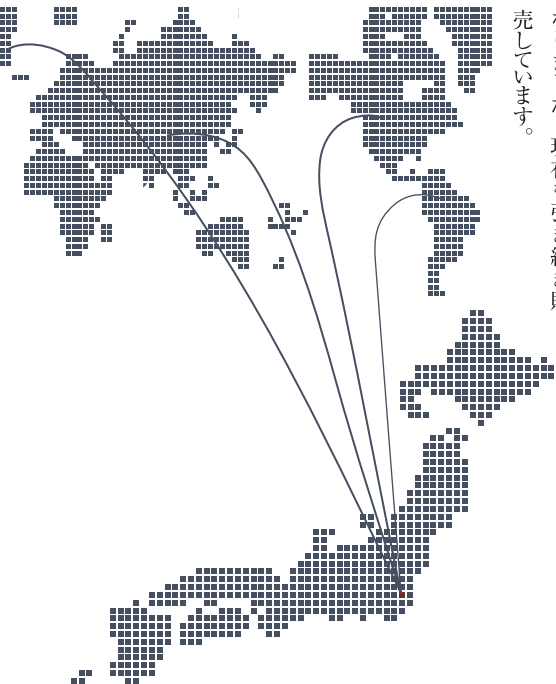
英国現地での販売・ECサイト販売

英国現地で運営するロンドンの工芸品販売店舗「和組」を活用し、インターネット販売と店舗販売を実施。クリスマス商戦にもあわせて積極的に販売し、笠間焼を英国に広める絶好の機会となりました。現在も引き続き販売しています。



英国作家との技術交流

コロナ禍で交流が制限されるなか、オンラインでの技術交流を行いました。笠間焼作家が英国大陶磁器産地にある陶芸の教育機関の生徒などへ作陶技術を伝えたり、意見交換をしたり、陶芸を通じた交流を深めました。



笠間焼誕生250年 記念対談

笠間焼の“これまで”と“これから”を、ベテランから若手までの4人が語りました



大津 廣司

OTSU HIROSHI

1947年笠間市生まれ。笠間焼伝統工芸士。大津晁窯四代目で、現在は笠間焼協同組合理事長を務める。

河野 カイ

KOUNO KAI

1972年笠間市生まれ。父河野 章さんの工房で陶芸を学び、現在は笠間焼協同組合青年部長を務める。

亀山 智美

KAMEYAMA TOMOMI

1986年茨城町生まれ。2022年3月に笠間陶芸大学校陶芸学科を卒業し、現在は同校研究科に在籍。

桂田 雅幸

KATSURADA MASAYUKI

1994年石川県加賀市生まれ。笠間陶芸大学校陶芸学科に今年度入学し、陶芸家を目指す1年生。

作家を目指した当時の笠間焼と作りの姿

大津 私は25歳（1972年）の頃に陶芸を始めました。当時は焼き物がプラスチック製品におされ、20数件あった窯元が10件ほどに減り、みんなが辞めるかどうか悩んでいました。しかし、茨城県窯業指導所（現県立笠間陶芸大学校）や芸術村ができたことで、全国から陶芸家や芸術家が笠間にたくさん集まりました。今もそうですが、昔から笠間は新しい人を受け入れる雰囲気がありますね。

私が陶芸を始めた頃は、甕やすり鉢などの大物がメインでしたが、需要が減るにつれて湯呑みなどの小物が転換していきました。その頃は小物を作る人が少なく、大物を作る作家たちも作り慣れないため、小物を作る若い人が非常に貴重でした。そこで、彼らが窯元にアルバイトとして入り小物を作っていました。若い人たちがたくさん入ってきてくれたことで産地が盛り上がり、作品の幅も大きく広がりました。

河野 私は20歳（1988年）の頃、「笠間の陶炎祭」の会場が芸術村から芸術の森公園に移り、10数年ぶりに遊びに行ってみたら作家さんたちがすごく楽しそうでした。焼き物ってこんなに楽しいものなのかと感じたのを覚えています。父が陶芸家でありながら子どもの頃は陶芸に全く興味がなかったのですが、このことをきっかけに焼き物に興味を持ち、父や地域の諸先輩方から陶芸を学ぶようになりました。

その頃はバブル経済が終わり、焼き物の業績も下がりがつあったと思います。それでも作家さんたちのエネルギーはすごく、皆さんガツガツと作品を作っていました。昔ながらの陶器とアートな感じの焼き物

が共存するというか、手作り感があって、おしゃれで、かっこいい器がたくさん並び、活気に溢れる雰囲気でした。

亀山 陶芸に興味をもち、陶芸大学校の制作展を見に行ったところ、驚くような出来栄の作品が並んでいて、「経験がなくてもここまで教えてくれるのか。それなら自分もやってみよう」と思い陶芸家を志し陶芸大学校に入学しました。先生や作家の先輩方がとても親身に話を聞いてくれるので、笠間は陶芸を学ぶにはとても良い環境だと思っています。

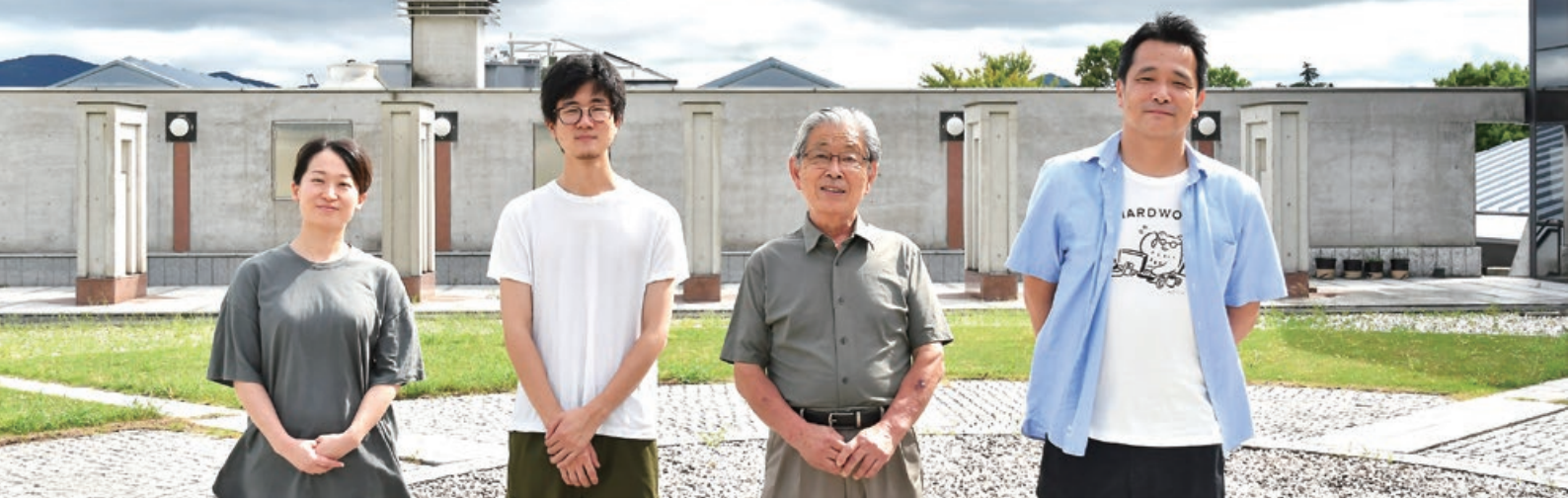
桂田 陶芸の学校を探していたなか笠間を訪れると、作家さんがとても自由な雰囲気で作って、たくさん個性がある産地だと感じました。私の地元にも総付けを特徴とする焼き物がありますが、自分にとって笠間焼は釉薬と土の掛け合わせの表現がすごく魅力的で、幅広い作品が生まれるままだからこそ、総合的に陶芸を学べるのではと思います、笠間に来ることを決めました。

作家を育てる環境

大津 笠間は陶芸家を目指す人のサポートがすごく充実していると思います。陶芸大学校卒業後も「スタジオ Eto」でアドバイスを受けながら作陶したり、市の創業支援補助があったり、他の産地と比べても非常に良い環境だと思います。

亀山 陶芸大学校は全国的にも設備が充実していて、一から焼き物を作る技術をしっかりと教えてくれるので、技術を基本から学びたい人にとっては一番良い学校だと思います。

桂田 ここではさまざまな作品に精通し



た技術を総括して教えてくれる。食器がきっかけで陶芸を学び始めましたが、学ぼうちにオブジェも作りたいと思うようになりまして。ただ、まずは自分の作品が手にとつてもらえるものになつてこそ自己表現だと思つたので、技術をしっかりと学んでいきたいです。

大津 心強いですね。優秀な人たちが育つてくれているからこそ、卒業後も笠間に残つて産地を支えてくれたら嬉しいです。

河野 今はいろいろな技法があつて、それを若い人たちは陶芸大学で学んでいる。私たちが逆に教えていたきたいくらいです。

笠間は陶芸イベントが多く、それぞれが担当をもちながら開催しているので自然と関わりができる。作家同士で相談し合えるのも笠間で活動する魅力の一つだと思います。陶芸大学の皆さんも陶炎祭にスタッフとして参加してくれていますね。

桂田 はい、私たちも参加させていただきました。接客を通して、こういう方にはこの作風が好まれる。“こういう作品が人気なのか”など、すごく勉強になりました。

亀山 いろいろな作家さんともお話ができるのでとても良い機会になりました。笠間は陶炎祭のほかにも作家同士で企画するイベントや展示が多いので、初めて陶芸家としてやつていく人にとつての魅力はかなり大きいと思います。

笠間焼の新たな魅力、笠間長石

亀山 笠間の素材で新しい原料ができ、これからの作品づくりをすごく楽しみにしています。河野さんは笠間長石でどん

な作品を作つていきたいと思っていますか。

河野 笠間長石はもとと陶芸大学で長年研究してきたもので、お声がけいただき一緒に原料の開発を進めてきました。笠間焼の大きな節目の年に、本当に良いタイミングで完成したなと思います。

笠間長石は原料なので調合次第であらゆる可能性があり、その人次第でさまざまな特徴を出しているのかなと思つています。私の場合、作品を見た瞬間「これは稲田石だ」と伝わりやすいものが二つぐらいあつた方が良いのかなと思つたので、なるべくシンプルに、原料の稲田石の魅力が伝わりやすいものを作っています。

お客さまの需要を見ても、地元のものを使つたものとても話題性があると思つています。そのような意味でもこの笠間長石ができて良かったなと思つています。使いやすい原料なので、これからさらに広まっていけば良いですね。

大津 笠間産の原料を使った作品ができるといふのは、笠間焼を特徴づけていくうえでも非常に良いものだと思います。笠間長石を使つたさらなる研究も進めていますので、ぜひ来年の陶炎祭も楽しみにしててください。

笠間焼誕生250年をむかえて

大津 笠間焼は、久野半右衛門が笠間の農家の生活が苦しい状況をなんとか興せなにかと考へていたところ、良い土を見つけた焼き物を作つてみたのがはじまり。大変な時を乗り越えたルーツがあつての笠間焼です。たくさん作家たちが今も自由に作陶を続けていることを思うと、笠間焼がこれからさらに大きくなつていくのだ

ろうと期待が膨らみます。

河野 陶炎祭にしても陶芸大学にしても、大津さんたちをはじめとする諸先輩方が整備されてきた環境で自分たちは自由にさせていたいただいているということを常日頃感じています。

そのような風通しの良い環境を大事にしながら、次の世代の方たちが活動しやすくなるようにサポートしていけたら良いなと思つています。

桂田 自分はこれからの身ではありませんが、先代が築いてきた歴史にこれから携

わつていけることをすごく光榮に思います。

20年後、30年後、自分も次の世代に歴史をつないでいける作家になりたいです。

亀山 長い歴史をもち、新しい人を受け入れてきたこの産地の雰囲気は今も変わらないもので、今も若い人が自由に作陶できるこの環境は、先輩たちが築きあげてきたからこそのもので、笠間焼という名ではありませんが、それぞれに思い思いの作品を作れる自由な雰囲気はとてもありがたいです。私もこの産地の一員として笠間焼を盛り上げていけるのがとても楽しみです。



笠間陶芸修行工房
スタジオ nido

📍 笠間市下市毛 45

笠間陶芸大学の卒業生を対象に、創業前の若手陶芸家育成支援として奥田製陶所の敷地内に平成 30 年に開設。「nido」はイタリア語で「巣」を意味し、「陶芸家として巣立つ前の場所、巣立っていく場所」という意味が込められています。

ここでは作業場・販売スペースの提供などを行い、作家を目指す若手たちを支援しています。

問 商工課（内線511）



国立笠間陶芸大学校

📍 笠間市笠間 2346-3

笠間焼の人材育成のほか、陶磁器に関する研究開発や笠間焼業界の技術指導を行う陶芸に特化した支援研究機関。第一線で活躍する陶芸作家が毎日指導にあたり、全国から集まる学生たちがここで技術を磨いています。